



★18

康熙字典（三卿伝史料1486~1525）

自然現象⑤

『康熙字典』と自然現象

《当館所蔵の『康熙字典』》

『康熙字典』は、清の第4代皇帝である康熙帝が康熙49年(1710)3月の勅命で張玉書、陳延敬らに編纂を命じ、康熙55年に完成した漢字字書です。古代字書の集大成と言え、その影響は大きく、後漢に編纂された中国最古の漢字字書『説文解字』と並び称され、これ以降、多くの字書は、『康熙字典』にならって「典」を書名に用いるようになりました。親字数は47,035字で、その他に古体の異体字を1,995字取めるとされるので、併せて49,030字となります。

康熙55年は、我が国で言えば江戸時代の享保元年に当たり、徳川吉宗が第8代将軍に就いた年です。それから64年後の安永9年(1780)、底本の誤り900余条を指摘する「琢屑」と日本人読者のための利用手引き「初学索引」を附録として加え、さらに本文の誤りを修正したうえで日本の安永版が翻刻刊行されました。そ

の後、中国では、清の第8代皇帝である道光帝の道光7年(1827)の勅命により、『康熙字典』の改訂作業が進められ、道光11年に刊行されました。道光版では2588条の訂正が加えられましたが、安永版を参照していないので、訂正が不十分な点もありました。

当館所蔵の『康熙字典』は二揃で、三卿伝史料と蔵田家文書に含まれます。三卿伝史料のものには、フリガナ、返り点がみられ、日本で刊行されたものであることが分かります。また、大きさから明治以降出版された袖珍(ポケット)版のものであると考えられます。それに対し、蔵田家文書のもものは、「道光七年奉旨重刊」とあるので、清で刊行した道光版と判断できます。

《『康熙字典』と私たち》

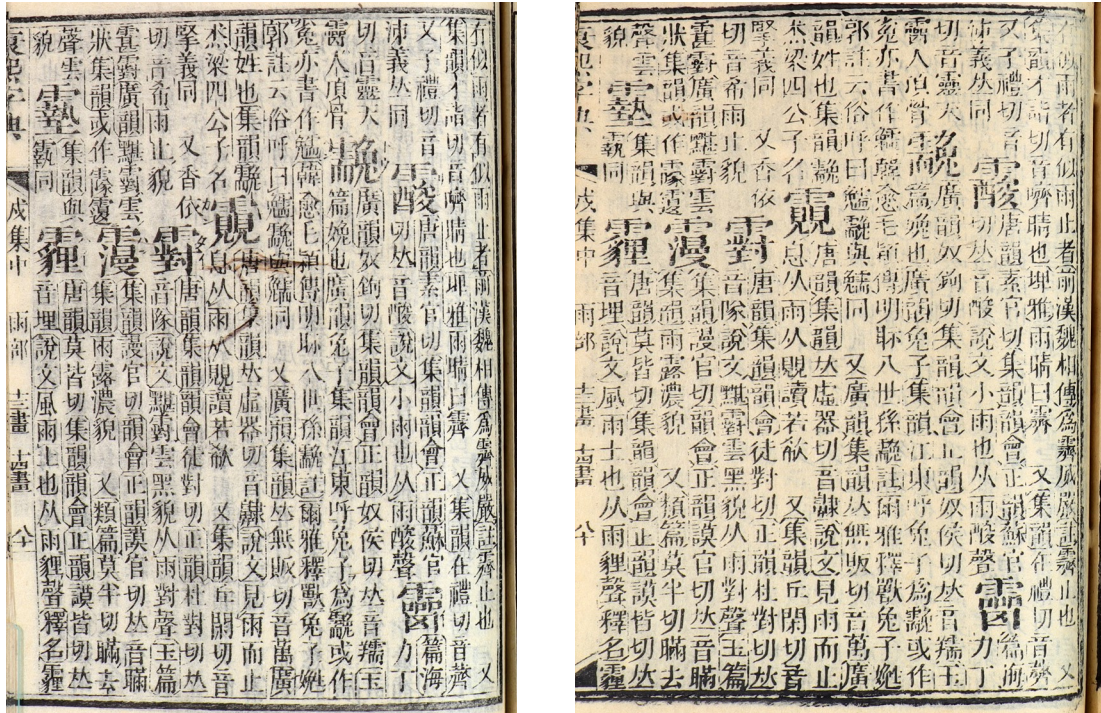
『康熙字典』が刊行されてからは、そこに掲げられる漢字の字体・字形が活字を作る際の規範となり、日本でも戦前の明朝体活字(旧字体)の設計はおおむねこれに



段氏説文解字注
(吉田樟堂文庫1805)

中国最古の字書は後漢の許慎により編纂された『説文解字』です。

当館では清代の訓詁学者段玉裁(1735~1815)の研究成果である『段氏説文解字注』(吉田樟堂文庫1805)を所蔵しています。



▲「霾」部分の比較(左：明治以降の袖珍版『康熙字典』〈三卿伝史料1521〉、右：道光版『康熙字典』〈蔵田家文書397〉)

よってました。また、国語審議会が平成12年(2000)「表外漢文字字体表」を答申し、表外漢字(常用漢字表以外の漢字)における印刷文字の標準字体を定めましたが、ここでも『康熙字典』に基づく字体が主に選ばれるなど、『康熙字典』は現在の私たちの言語活動にも欠かせないものとなっています。

《『康熙字典』を使う》

『康熙字典』雨部には自然現象を表す文字が含まれますが、総数353字の中から先年PM2.5が話題になった際に中国語圏で用いられることの多かった「霾」を例にして『康熙字典』の調べ方を見ていきましょう。因みに「霾」は、音読みでは「漢音バイ、呉音マイ」、訓読みでは「つちふる」です。「霾」の解説の一部を以下に示しますが、本来は囲みで示される書名を便宜上、【 】で表しています。唐韻は唐代、集韻は宋代、韻會は元代、正韻は明代に編纂された字書です。説文は上述の『説文解字』で後漢の許慎が編纂した最古の字書です。

【唐韻】莫皆切 【集韻】 【韻會】 【正韻】謨皆切 竝音埋 【説文】風雨土也从雨狸聲

まず、文字の読みを示しますが、表音文字がないので二字の漢字の子音、母音の組合せ(反切)で表します。【唐韻】「莫皆切」は「莫(ばく)」の子音と「皆(かい)」の母音の組合せを示し、「ばい」と読むことができます。【集韻】【韻會】【正韻】には「謨皆切」(謨の呉音はもく)「竝音埋」(埋の音に同じ)とあり、現代中国の読み「まい」(日本

では呉音読み)と同様になっています。【説文】には意味が示しており、「風雨土也」の解釈が難しいですが、三卿伝史料の返り点に従えば、雨を名詞ではなく動詞として考え、「風が土をふらす」の意味にとることができます。白文では解釈が難しいものについては、日本で刊行されたものを参照することも一つの方法です。

《雨部の漢字から新たな語彙を造る》

PM2.5が話題となった2013年、空中に浮遊物が漂う状態を示す「霧霾」が流行語となりました。「霧」「霾」は単に自然現象を表す漢字ですが、熟語となることでマイナスの意味を持つ語彙となりました。英語の「スモーク」「フォグ」から「スモッグ」が生まれたのと似ていますが、中国語ではこの「スモッグ」を「霧霾」と訳しています。

そのほか、雨部にある漢字から生まれた語彙として「霹靂舞」があります。「青天の霹靂」の霹靂で、雷の意味です。直訳すると雷ダンスという意味になりますが、「ブレイクダンス」の意味で使われています。かつて日本に見られた「雷族」を彷彿させます。

今後も気候変動の激化や若者文化の多様化に伴う新たな自然現象、社会現象を表現するにふさわしい雨部の漢字を使った語彙が造られていくことでしょう。

【参考文献等】

- 谷本玲大 著訳『概説『康熙字典』』、文字文化協会、2015年
- 文化庁ウェブサイト